
スーツ

日頃寝 ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スーツ

【Nコード】
N7522Q

【作者名】
日頃寝 ハル

【あらすじ】
八百屋の山田くんのお話。自分の現状に不満があるわけでもないが満足というわけでもない、山田。スーツを着て電車に乗り畑を目指す。

太陽の光が暖かく、山田はその光が黄色く輝いているかのような錯覚を覚えた。

もちろん光に色はなく、ただ黒いスーツに反射してキラキラと塵を浮かばせているだけだ。

しかしこんな冬の、寒い、凍えそうな気温の中で、その光は唯一の望みのようなものだった。

何の？

もちろん寒さから逃れる方法として。

人生初めてスーツを着た。

山田の仕事は実家の八百屋の手伝い。

就職活動もしなかったし、高校卒業後すぐに実家を継ぐことを決めた山田はスーツなんて着る機会もなかった。

採寸し、自分の体格にぴったりと合ったスーツは、何時ものジャージに比べて動きにくい。

なるほど。これが社会で生きる人の生き難さだな。

山田は世界に起きるインフレとかデフレとか、社会のよく分からない大きな事件、不安感の原因が分かったような気がした。

スーツを着て、駅に出てきた。

時間は通勤ラッシュが終わって、人の少ないお昼前。

もともとそんなに大きな駅ではないが、時間に寄ってこんなにも人の数が違うのか。

山田は人間が時間に寄って区切られている、そう実感した。

そう言えば学生時代の頃、よく電車の閉じるドアと競争した。

あの頃思ったが、ほんの30秒早く家を出るだけで、違う一日を送

れるのだ。

30秒違っただけで、教師に出席簿で頭を殴られること無く、ホームルームに間に合い、あわよくば一限目の宿題も終わらせることが出来たのだ。と。

山田が乗ったその電車は、初めて乗る路線だった。

なんと自分で押す開閉ボタン。

これならば発車間近の電車と競争しなくても、良かったんじゃないか。

と高校の進路を誤った中学生の頃の自分を責めた。

しかし思い返せば、電車のボタンを押す前にきつと電車は動いていただろう。

そうしたら高校三年間で五回は電車に巻き込まれていただろう。

動き出した電車はゆっくりと長閑な畑を抜ける。

長閑、と言っても何も植わっていない、土色一色の畑だ。

時折思い出したようにビニールの温室が立つが、人も無く、寒々しい。

「お前、八百屋になるんだってな。終わったな」

高校2年の冬。学校の進路説明会のあと友人が言った。

山田が通っていた高校は大学に進学する生徒が少なかったから、説明会はほとんど就職活動の説明だった。

就職氷河期？山田はよく知らない言葉を聞いて、ふーん大変そうだ。と思っていた。

クラスの大半は就職。

それ以外は専門学校。

少し背伸びして短大。

きっとソイツも進路のことと悩んでいたのだろう。

早々に実家のあとを継ぐことを決めた山田を、羨ましく思ったのだ。

ろう。

「八百屋じゃ出会いもないだろうな」

と薄く笑って、山田の背中を思い切りバンバンと叩いた。

「コノヤロー」

と山田は笑ったが、心情は暗かった。

自分の安易さ、将来の平凡さ、そんなものを突きつけられたような気がしたのだ。

今頃、その友人もスーツを着ているのだろうか。

いや。きっと作業着だ。

友人は念願叶って自動車の部品を作る工場に入社したのだから。流れ行く景色の中に浮かぶのは、アイツ等と過ごした毎日。終わっちまったんだなあ。とつくに。

と、山田は思った。

降り立った駅は無人駅だった。

高校の友人の一人に、最寄駅が無人駅だという奴がいた。

「田舎過ぎんだよー」

とアイツは言っていたが、遊びに行ったとき本当に何も無くて驚いた。

聞いたこともないコンビニは24時間営業ではなく、夜の9時に閉まるらしい。

「キセルは出来るんだけどな」

駅のホームで帰りぎわに言った奴の言葉に、通りかかったおばさんが

「ちょっと、アンタ！」

と偉い剣幕で怒り、収拾が大変だった。

「ここも田舎だなー」

山田は思わず、口に出した。

見渡す限り、畑。山。

遠くに民家らしきボロ家。

冷たい風が吹いて、コートを着てくれば良かったと後悔した。

手をポケットに突っ込む。

家を出る前には輝いていた太陽もなりを潜めて、雲の隙間からこちらを窺っているようだ。

手元にある地図を広げるが、目印となる看板が見当たらない。

此処まで田舎だと「ようこそいらっしやいませ!!」と書いてあるらしい看板の存在意味が分からない。

来る人もいないだろう。

とつくに撤去されたか、違う看板に塗り替えられたか。

そう思つて電話しようとケータイを鞆から出すが、電波が無かった。

「おいおい、マジかよ」

来る時間は何時でも良いと言われているが、そう遅くなっても迷惑だ。

山田は遠くに見える民家を目指した。

畑のど真ん中にちょこんと建つ小さな家は、家と言うより小屋で、建つと書くより立つと書いた方が似合いそうだと、近づく内に思った。

木の家。いや、板の小屋だ。と山田は思った。

「ごめんくださーい」

戸をノックすると、軽い安っぽいベニヤの音がした。

「ほいほい」と言いながら、中からもこもこ着込んだオジサンが出てくる。

「アンタもそろそろ、学生気分じゃられないよ」

母親にそう言われたのは一ヶ月前の頃だ。

自分なりに真面目に毎日店にでて、野菜やら果物やらを売っていたのに、学生気分だと言われて、腹が立つより驚いた。

父親は母の隣で何も言わないが、頷いている。

「はあ？俺真面目に働いてんじゃないか」

俺は言い返した。

夕飯を食べている最中だった。

「バイトみたいにレジ打って、野菜売ってるだけで、働くとは言わないよ」

「……うつて」

父親が小声で言うのは無視した。

「おかあちゃんは今アンタに勉強して、会社に入って、スーツ着て仕事してほしかったんだ」

「そんなこと今言うかよ」

山田の母親は言う内容のわりには、明るい表情だった。

どちらかと言うと、笑っているような。

母親は高らかに宣言するように言った。

「そこでだ。アンタにお使いを頼みたいんだよ」

「ああ、待ったよ」

オジサンは俺が何も言わないうちに、そう言っただけで俺を小屋に招き入れた。

ダルマストーブって言うんだろうな。これが。

狭い小屋の真ん中に置かれているストーブには湯気をはいているケトルが置かれている。

オジサンはケトルからお茶を注ぐと、山田に渡した。

小さい小屋はどうやら住んでいる家ではなく、畑仕事の休憩所らしい。

「家に来るかと思ったんじゃないが、こっちに来るとはな」

オジサンは着込み過ぎて真ん丸いシルエットをさらに丸くして、ス

トープの前に座った。

「ええ、道が分からなくなって、近くに小屋を見つけたので此処で聞こうと思ひまして」

山田は地図に不備があったことは言わなかった。

「どうしてこちらにいらしたんですか」

山田は聞く。

約束していたのに、どうして小屋にいたのか。それはそれで助かったのだが。

「ここの方が暖かいしなあ」

オジサンは目を細めるようにして言う。

「はあ、えーと、本題に入りましょうか」

山田は気を取り直して言う。

「本題ねえ」

オジサンはぼりぼりと灰色の短い髪の毛を掻く。

山田は舞い出てくるフケにギョツとした。

「さて……」

山田のスーツ姿は今回の結果になにか関係していたのだろうか。

いや、きっとあのオジサンは俺がジャージでも気にしなかっただろう。

と山田は思った。

今回、こうして山田は農家に見学しに行ったのだが、あまり何かの参考にはならなかった。

冬だから特に何もすることがなさそうなオジサンはビールハウスの説明をして、小屋に戻ってしまい、山田はオジサンの家にお邪魔してオジサンの奥さんに昼飯を頂いた。

焼き芋と漬物と何故かチャーハン。

しかし、山田は思った。

こうして俺が何か、農業に関係することをする度に、八百屋の仕事にはまっけていく。

野菜を作っている人をみたり、聞いたりするたびに。

良い意味じゃない。

八百屋業から抜け出せなくなるのだ。

それはいつか友人が言っていた「終わってる」状況に向いつつあるということだ。

母の言う「スーツ着た会社員」から遠のくということだ。

山田は今まで、八百屋の自分を情けなく思っていたのかもしれない。八百屋の自分の未来を、悲観していたのかもしれない。

それでも情性で、というよりスムーズに運ばれるままこの道を歩いてきた。

いつか後ろを振り返ったとき、もっと勉強していればなあと後悔したこともあった。

だけど、今は少し違う。

自分の道を受け入れたのかもしれない。良い意味でも悪い意味でも。けど何でか、悪い気はしないんだよな。

と帰りの電車の中、落ちていく太陽を見ながら、山田は思った。

すっかり暗くなって、もちろん太陽なんか沈んで、風も冷たく凍えそうなのに、山田は浮き浮きとした気分で家に帰る。

煌々とした明かりを灯す小さな八百屋を目指して。

そこが山田の未来だったし、今、生きる場所でもあったのだから。

「おかえり。スーツ、意外に決まってるねえ」

家を出るときは何も言わなかったくせに、土臭くなったスーツを見て母が言う。

「スーツ姿の八百屋って新しいと思わない？」

山田はそんなことを言う母に少しあきれて、少し笑った。

昨日とは、ほんの少し違う明日が待っているような気がした。

（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

ほのぼのしております。

私は、「僕は」「私は」と主人公目線で進むお話ばかり書いていたので、少し違う書き方に挑戦してみました。
上手く書けているでしょうか。

現状に納得することって大切だと思うんです。

諦めと納得って似ているけど、納得って前向きな表現だと思います。
そういう気持ちを込めて書きました。

感想、ご意見、宜しかったら、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7522q/>

スーツ

2011年10月8日01時09分発行